

全員参加の全国学力学習状況調査 (全国学力テスト) は中止を!

子どもと教育を守る高知県連絡会

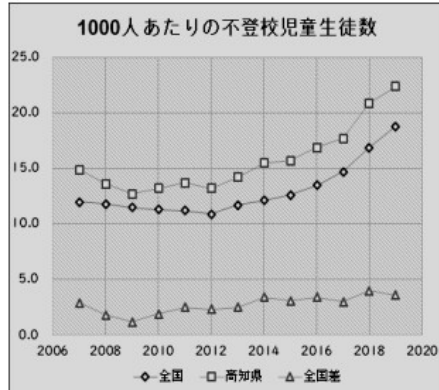
全国の小学6年生、中学3年生全員に対して行われている「全国学力学習状況調査」(以下「全国学テ」)は、2021年5月の実施で14回目を迎えました。

「全国平均以上を自指す」が「全国学テ」の始まった当初、高知県の結果が全国の最下位層となっていたことを受け、高知県教育委員会より「全国平均より上位を目指す」との目標が掲げられ、学校教育の至上命題化されてきました。

そのことで、学校では「過去問題」を使った練習や、テキスト教材を優先して授業が行われるなどの「全国学テ」に対する事前のとりくみが行われるようになっていました。また、家庭学習と「学力」と関係があるという結果分析を受けて、宿題の量も顕著に多くなっています。

「全国学テ」が競争に拍車をかける

また、高知県では、2012年より高知県独自の学力状況調査(以下「県版学テ」)も始めました。実施対象学年が小学校5年生と中学校2年生であること(現在は小学4年生、中学1年生にも拡大)、12月に実施していることなどからも「全国学テ」の事前対



争に追われ、宿題の多さに「子どもの時間」を奪われ、精神的に追い詰められている。教師も大きな影響を受けています。「全国学テ」において全国の平均点以上という結果を

策的な位置づけで行われていることは明らかです。そのことが、よりいっそう点数競争を激化させています。

不登校増、教える喜びを奪われる教員
一方、高知県の不登校者数は増え続け、全国平均との差も広がっています(ラフ参照)。2019年度も小学校334人、中学校783人と増加を続けており、千人あたりでは小学校103人(5位)、中学校453人(2位)です。このことは、「全国学テ」「県版学テ」を中心とした点数競争とは無関係ではありません。子どもたちは、点数競争に追われ、宿題の多さに「子どもの時間」を奪われ、精神的に追い詰められている。

求められ、テストの点数を上げるための「指導」を強いられ、教員としての誇りや、やりがいも奪われています。

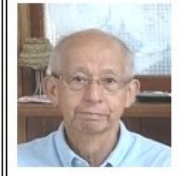
抽出調査をこそ正確、教員に一度で十分
「全国学テ」の第一義的な目的は「学力・学習状況を把握・分析」することにあります。そのためにも、抽出調査の方が適しています。また、全国学テも県版学テも毎年同じような分析結果が発表されているように、毎年行う意味もなく、数年に一度の実施にすべきです。

「全国学テ」には毎年50~60億円の予算が使われています。その予算は教員不足解消などの教育条件整備にこそ使われるべきです。「全国学テ」を利用して、競争を煽ることや学力を向上させようとする考え方は、国際的にみても時代遅れです。そして、その弊害も取り返しのつかない大きなものになりつつあります。既にいくつかの県では独自のテストを取りやめることが始まっています。

は今すぐ見直しを!
子どもたちに悪影響を与えず、教育そのものにも悪影響を与えていない「全国学テ」とそれを基にした施策を、だちに直すことが必要です。
国や県に対して次のことを求める声を広めていきましょう。
①「全国学力・学習状況調査」を全数調査から抽出調査にし、数年間隔での実施とすること。
②「高知県学力定着状況調査」をすぐに中止すること。
③子どもたちが大切にされる教育、学校づくりにとくめるような条件整備を行うこと。
2021年7月1日
子どもと教育を守る高知県連絡会



高退協新加入者紹介 埴 良一さん



昨年7月末に、西土佐下方へ、移住して暮らしました。

4人の子どもたちが生まれ育った北海道を離れ、新天地にやってきました。様々な偶然と奇跡が重なって、北海道生まれ育ちの4人の子どもたち全員が、四圍で生活しています。

奈井江商業高校を定年退職し、退職後、70歳の直前まで講師として、5校の高校に勤務しました。最後に勤務したのは、新十津川農業高校でした。

西土佐下方は、住んでみると、素晴らしい自然と人々に包まれた土地で、感動の日々を送っています。住宅の脇の小さな沢は、多種多様な生き物の日替わりの舞台です。

トンボ類は、13種類が確認できました。この中には、四つ星☆☆☆☆、トンボが2種います。高知県版トンボ図鑑「トンボで守る食の安全」は、素晴らしい図鑑です、これがないと、私には、トンボの同定は、とても難しく、諦めていたと思います。

普段、超高速で飛び交うオニヤンマが、眼前手が届くようなところをゆったりと飛ぶ姿は、大変美しいです。この沢のカエルの主は、ツチガエルですが、先日、雨の降った後、突然、激流に変わった後、突然、居なくなりました。そして、どこから来たのか、ノサマガエルが、巨大なヒキガエルが、そのそばまで、また、小さ

刻々と変化する自然の中で、毎日、驚きと感動の毎日です

いヒキガエルが、畑の枝豆の根元に座って居たこともあり、アマガエルが、一日中、直射日光の下、座って居たことが、何度かありました。

庭の木の頂点の葉の上、ポツ、ポツ、ガポ、というような音です。この沢で、イノシシ、鹿の鹿鳴をしている若い青年は、「気持ち悪いのでそばによらんようにしては」と言い、近所の人は、この洞をのぞきに来て、入り口の岩を蹴つ飛ばして「音が、何も変わらんけん、これは、奥で水が湧いている」といいます。

ところが、寒さがゆるんだ2月末のある日、この沢を登っていくと、私の足音に、反応



カジカガエル

して、無数の何かが、びよんびよん飛び、この洞に飛び込みました。あつという間のことでしたが、間違いなく、無数のカエル!!そして、そばでじっと、待っている、5分が10分も待ったでしょうか、洞の入り口に無数の顔が現れ、外をうかがい始めました。そのうち、そろりそろりと、一匹二匹と、外に出てくる、ではありませんか。また、人の気配を感じると、さっと穴に飛び込み、遅れてしまったカエルは、沢の水に飛び込み、見事な水泳で泳ぎ、岩の陰に隠れました。これは、紛れもない、カジカガエル。手足の指が長く吸盤を持ち、体は細長い。体の色は、周りに合わせて変化している。この洞は、越冬するカジカガエルのマンションだったのだ。

私は、カジカガエルは、この沢で美しく鳴くものと思っただけ、間もなく、一匹残らず居なくなりました。美しい鳴き声は、この沢が流れ落ちる広見川の本流から、響き渡ってきました。

カジカガエルが、洞の中で、集団で越冬するとしても、なぜ、一冬中、あの様な鳴き声を立て続けて居たのか、不思議なことだ。蛇は冬ごもりしているかもしれないが、イノシシも、タヌキもたくさんいるだろうに、謎だ。

何よりも感動するのは、この下方、西ヶ方、方の川の私と同年代のおばちゃんたちが、沢を登って、このカジカガエルのマンションを見に来たこと。この地に生まれ育った人々には、自然は、当たり前の日常であり、日々の自然の変化を「よく見聞きし、わかっている」。日々、刻々と変化する自然の中で、毎日、驚きと感動の毎日です。